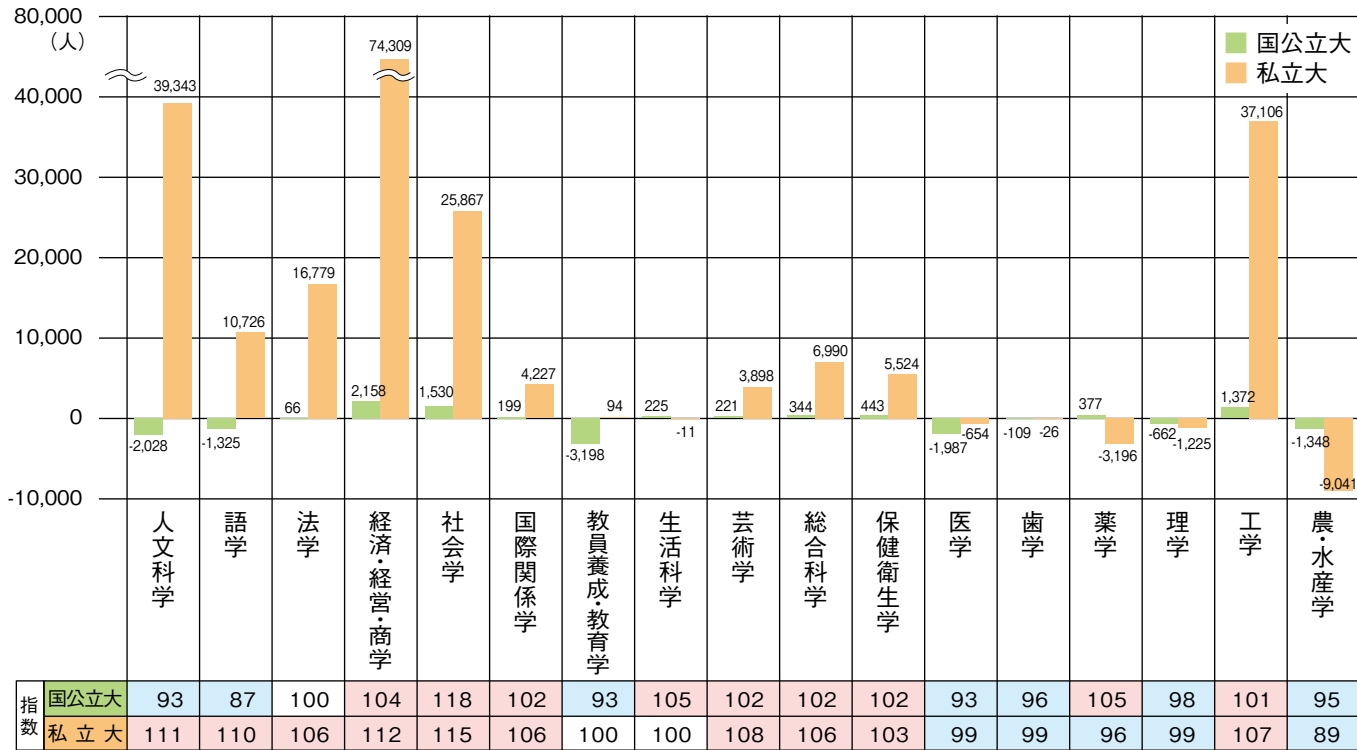


【図表1】私立大で志願者数が増加 ～2018年度入試のエリア別志願者数増減指数

エリア	18歳人口	2018年度/2017年度比					
		国公立大		私立大			
		募集人員	志願者数	募集人員	志願者数		
				一般	センター利用	全体	
全国	98	100	99	101	106	110	107
北海道	97	100	100	100	100	105	102
東北	97	98	106	103	94	96	95
関東	99	100	95	99	104	105	104
首都圏	99	99	96	101	106	111	108
北陸	99	100	110	105	115	100	109
中部	99	104	100	99	102	105	103
近畿	98	100	96	101	108	111	109
中四国	98	101	99	99	101	99	101
九州	98	100	100	102	101	108	103

*ベネッセコーポレーション調べ。表の数値は前年の志願者数を100とした指数
 *募集人員は一般・センター合算値。私立大のセンター併用型入試はセンター利用方式で集計
 *関東：茨城県、栃木県、群馬県、新潟県 首都圏：埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、山梨県 中部：長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県

【図表2】文系学部での志願者数増加がめだつ ～学問系統別志願者数の増減(2018年度入試)



*ベネッセコーポレーション調べ。グラフ内の数字は志願者数の前年差。指数は前年の志願者数を100とした値

生がより安全志向になり、併願先選びの視野が広がったことが考えられます。

上向きの景況を支えに 人文・社会科学人気続く

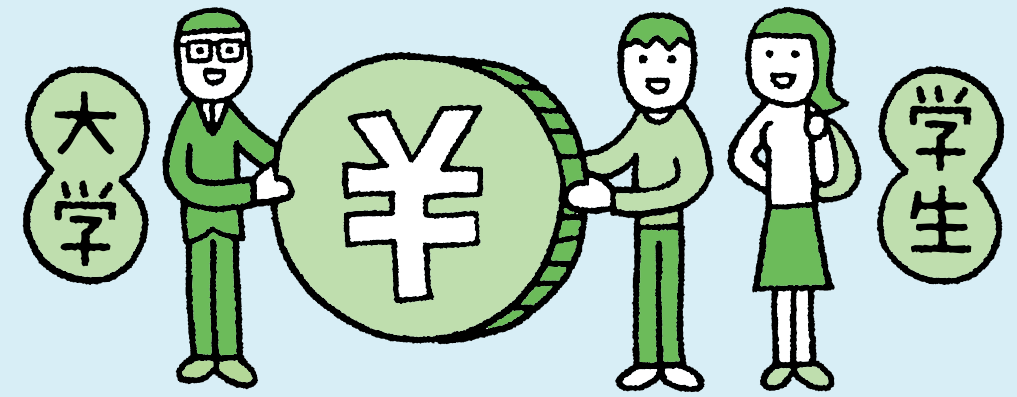
学問系統別志願者数の増減【図表2】を見ると、「文高理低」の傾向が続いています。私立大の場合、正確には、全体の志願者数が増加している中、理系より文系が増えている状況だと言えます。

私立大学の人文科学系統、経済・経営・商学系統、社会学系統の志願者数は、対前年指数で111、112、115と、増加がめだつていますが、しかし、3年生11月模試での志望状況では、志望者数の対前年指数はそれぞれ、100、99、102でした。学問系統の人気以上に入試本番で志願者数が増えている状態であったと言えるでしょう。

理系では、工学系統が、国公立大学、私立大学ともに志願者数を増やしています。さらに詳しく学問系統別に見てみると、情報工学で志願者数が増えており、志願者数の対前年指数は国公立大学で107、私立大学で124となっています。AIやIoT、データサイエンスに関係した学科が工学系統の中では人気を集めています。

*2017年度 高3生・高卒生第3回ベネッセ・競合マーク模試・11月

自身を成長させる 教育力への投資 学納金



入学金や授業料等の学生納付金(学納金)を確保するためには、
 自学が求める学生を獲得して育成し、その成果を募集に生かすサイクルが重要だ。
 2018年度入試の結果を基に、今後の募集について考察する。

- ①景気動向を反映し、経済・経営・商学系統を中心とした文系人気が続く
- ②入学定員管理の厳格化が、志願者数の増加、合格者数の減少(不合格者数の増加)を引き起こし、受験生にとっては私立大学の入試が厳しさを増した
- ③私立大学は合格者の歩留まりがさらに予測しづらくなった

入定管理の厳格化が影響 都市部の志願者数が増加

(株)進研アド マナビジョン 企画部
 デイターマーケティング課
 グループリーダー 仁科佑一



にしなゆういち●(株)ベネッセコーポレーション 高校事業部関東支社営業、首都圏営業 課情報セクションなどを経て、2016年より(株)進研アドにて高校と大学を結ぶ大学マーケティング企画を担う。

2018年度入試概況

データで見る最新入試動向

以下、詳しく見ていきましょう。まず、エリア別の志願状況を見てみます【図表1】。

国公立大学の志願者数は、関東、首都圏、近畿などでやや減ったものの、全体としてはほぼ横ばいでした。

一方私立大学の志願者数は、東北以外は増加しています。特にセンター利用入試での志願者数増加が顕著で、全国で10ポイント増となりました。首都圏、近畿など都市部での志願者数が目立って増えているのは、入学定員管理厳格化の影響と考えられます。2016年度以降、大規模大学や東京の大学を中心に合格者数が絞り込まれている状況から、いずれかの大学に確実に合格するために受験生は受験校を増やしたのでしょう。同じ動きは2016、2017年度にもあり、その際、志願者数が増えたのは主に大規模大学でした。しかし本年度は中小規模の大学も増えた点に特徴があります。受験

入学定員管理厳格化の影響

【図表5】 高校教育の変化をふまえて、入試改革への対応を進めていく必要がある
～大学入試と高校教育の改革スケジュール

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
大学入試	大学入学共通テストの導入	「実施方針」の策定・公表		「実施大綱」の策定・公表	共通テスト実施				
	外部英語検定試験の入試活用	「大学入試英語成績提供システム」の参加要件確認結果の公表	入試での利用拡大		共通テストと併用利用	併用			次期学習指導要領に対応した入試実施
	多面的・総合的評価	eポートフォリオの利用拡大など			学力の3要素を各入試区分で評価				
	各大学の動き		新入試対応方針や変更予告の公表	新入試対応の周知など	入試要項公表→新入試スタート				
高校教育	次期学習指導要領	告示	周知・徹底			実施	年次進行		

【図表6】 「新旧入試混在期」は、学年ごとに異なる特徴に注目
～高校生各学年の志望動向(2018年度)

	学年の特徴	予想される志望動向	学生募集広報のポイント
高校3年生 (2019年度入試)	現行入試 (安全志向)	▶ 入学定員管理厳格化の影響は続く ▶ 私立大入試の難化傾向が続く	▶ 私立大入試難化をふまえた入試広報 (併願可能な入試方式や外部英語検定試験の活用など) ▶ 学力上位層の志望者を対象とした大学の認知拡大 (不本意入学としないために大学理解度を高めるなど)
高校2年生 (2020年度入試)	現行入試 (“超”安全志向)	▶ 入学定員管理厳格化の影響は残る ▶ 非常に強い現役志向 (絶対に浪人したくない)	▶ 非常に強い現役志向をふまえた入試広報 (併願受験を促す情報提供を行うなど)
高校1年生 (2021年度入試)	新入試 (“初めて”の不安)	▶ 新入試に対する不安 ▶ 前年度の反動で既卒生は減少	▶ 入試情報ニーズの早期化への対応 (1年生向けの入試ガイドを作成するなど)

この先3年間の学生募集は、現行入試の対応と、新入試に向けた対応を行う「新旧入試混在期」に突入します【図表5、6】。よって学年ごとの違いを意識した働きかけが重要となります。

3年生は、2018年度入試の結果をふまえて、さらに安全志向が強まるでしょうから、志望大への合格率を高めるための入試情報に対する関心が高いと思われます。併願可能な入試方式や外部英語検定試験の活用提案など、受験生の関心に応える情報提供が必要でしょう。

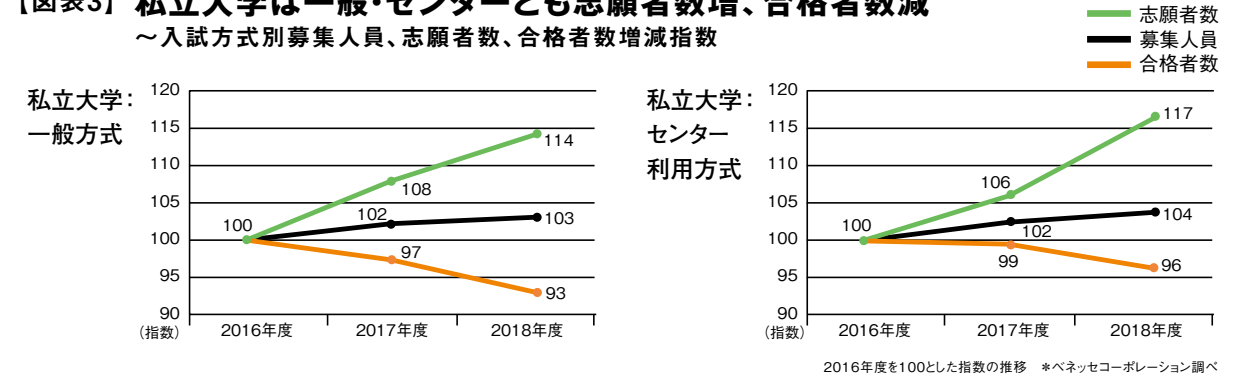
2年生は、現行入試での現役合格を強く意識する学年です。併願パターンや併願校数を増やして志望校を検討することが考えられます。志望校検討の初期段階から、高校生の併願校リストに入ること意識した情報提供が効果的でしょう。

1年生は、自分が受験する入試がどうなるのか、とても不安を感じている学年です。1年生向けに入試ガイドを作成するなど、早期に入試情報を提供することは、受験生の不安を取り除く一つの方法だと言えます。

「新旧入試混在期」の募集戦略

各学年の状況に対応した広報戦略がカギ

【図表3】 私立大学は一般・センターとも志願者数増、合格者数減
～入試方式別募集人員、志願者数、合格者数増減指数



【図表4】 大規模大学で年々進む、合格者数の絞り込み
～主な私立大学の入学定員・合格者数(一般・センター利用方式計)3か年推移

大学	2016年度			2017年度			2018年度		
	入学定員(人)	合格者数(人)	合格者数の前年度差(人)	入学定員(人)	合格者数(人)	合格者数の前年度差(人)	入学定員(人)	合格者数(人)	合格者数の前年度差(人)
日本	14,760	29,517	▲184	14,869	29,333	▲184	15,341	29,370	▲37
早稲田	8,940	17,976	▲2,049	8,940	15,927	▲2,049	8,940	14,532	▲1,395
立命館	7,157	31,983	▲3,841	7,629	28,142	▲3,841	7,844	24,995	▲3,147
東海	6,755	13,074	▲395	6,758	12,679	▲395	6,758	11,777	▲902
東洋	6,732	23,938	736	7,301	24,674	736	7,301	21,504	▲3,170
明治	6,730	24,144	▲1,290	6,730	22,854	▲1,290	7,760	21,216	▲1,638
近畿	7,050	25,439	1,650	7,970	27,089	1,650	7,970	25,562	▲1,527
関西	6,522	18,908	▲902	6,522	18,006	▲902	6,522	16,026	▲1,980
法政	6,441	23,192	▲2,011	6,441	21,181	▲2,011	6,441	17,548	▲3,633
慶應義塾	6,405	9,252	▲274	6,405	8,978	▲274	6,405	8,817	▲161
同志社	6,025	17,735	▲747	6,025	16,988	▲747	6,351	16,143	▲845
関西学院	5,690	13,718	▲1,376	5,700	12,342	▲1,376	5,700	9,882	▲2,460
中央	5,527	16,431	▲574	5,981	15,857	▲574	5,981	15,198	▲659
帝京	5,369	8,235	▲449	5,371	7,786	▲449	5,371	7,654	▲132
龍谷	4,539	10,049	▲204	4,693	9,845	▲204	4,693	9,465	▲380
神奈川	4,230	9,294	69	4,230	9,363	69	4,230	9,142	▲221
立教	4,150	12,838	▲1,578	4,604	11,260	▲1,578	4,604	10,452	▲808
福岡	4,110	13,734	▲501	4,110	13,233	▲501	4,420	12,985	▲248
専修	4,000	10,721	▲829	4,000	9,892	▲829	4,000	8,437	▲1,455
青山学院	3,902	9,504	▲1,440	4,220	8,064	▲1,440	4,220	7,313	▲751
東京理科	3,565	16,268	291	3,890	16,559	291	3,910	15,833	▲726
駒澤	3,315	10,586	▲1,017	3,315	9,569	▲1,017	3,315	8,550	▲1,019
名城	3,155	10,765	166	3,370	10,931	166	3,370	10,943	12
京都産業	2,935	8,378	▲193	3,305	8,185	▲193	3,410	6,118	▲2,067
国士館	2,820	6,028	▲789	2,820	5,239	▲789	2,820	4,057	▲1,182

*大規模大学を一部抜粋。合格者数は一般・センター入試合算。Between編集部調べ

次に入学定員管理厳格化の影響を見てみましょう【図表3】。私立大学では一般・センター利用ともに志願者数は増えており、2016年度の値を100とすると、2018年度はそれぞれ114、117となっています。一方、合格者数は93、96と減少しています。

主な大規模私立大学について、3か年の合格者数の推移を見ると、2017年度に続いて2018年度も合格者数を絞り込んでいく大学が多いことがわかります【図表4】。志願者数が増える一方、補助金や学部新設の認可に影響する入学定員超過率の基準が厳しくなったために合格者数をさらに絞る、という状態が続いています。

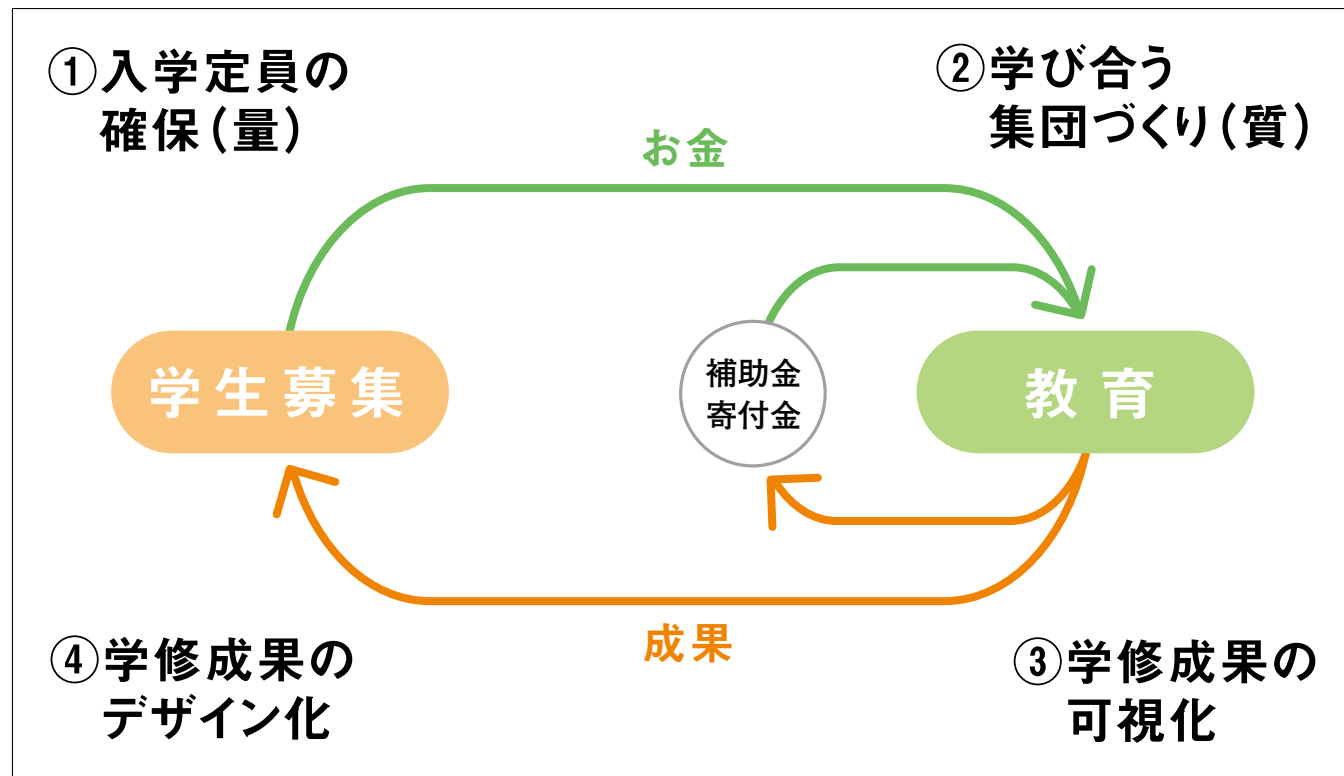
その結果、浪人を選択する受験生が増えたとの声が多く聞かれました。

私立大学からは過去2年以上に、「歩留まりが読みにくかった」という声が挙がりました。少なくとも現行入試最後の2020年度入試までは安全志向が続き、志願者数の増加が続くと考えます。ただし、増えるのは安全校で、挑戦校における志願者数は、むしろ減ると考えられます。

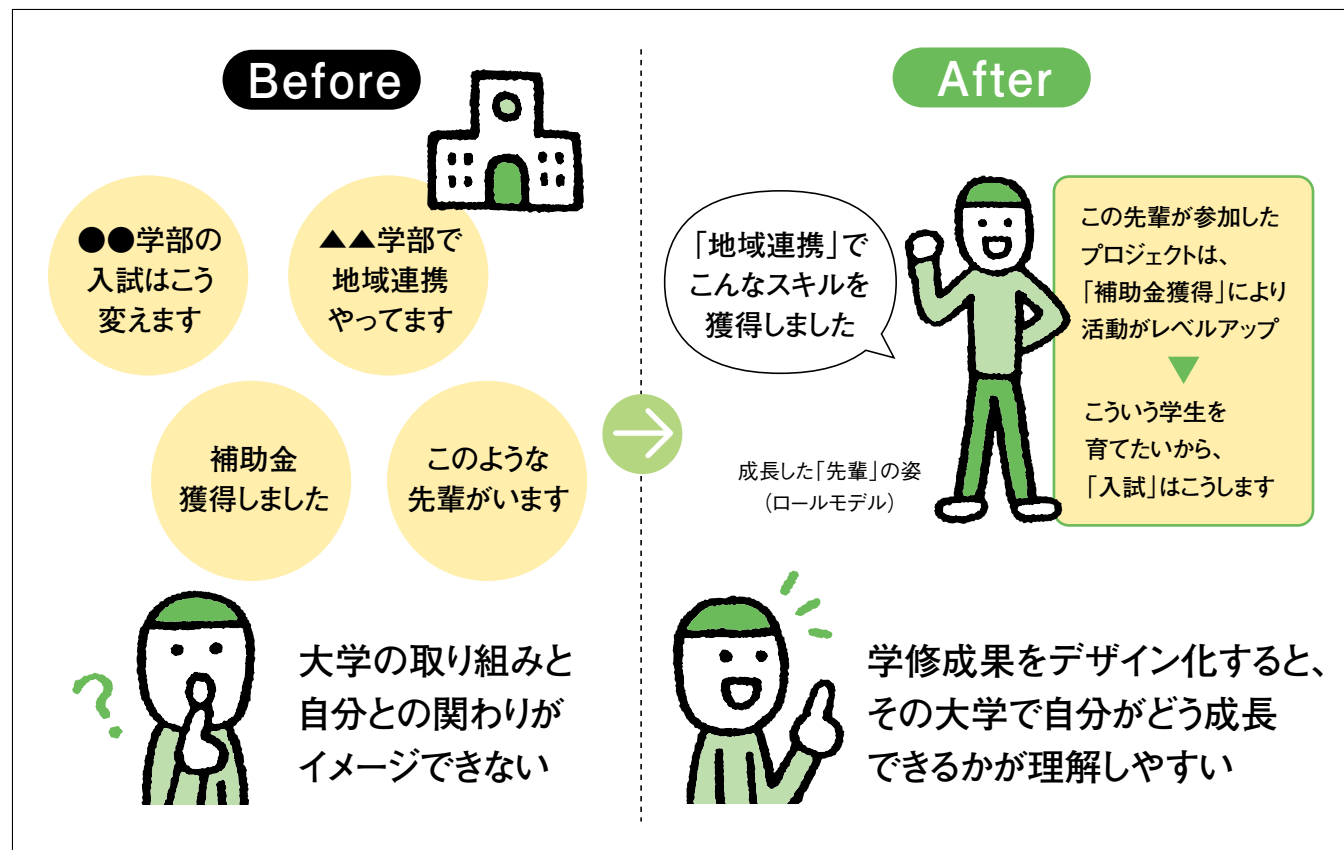
次年度も続く見込み

歩留まり予測の難しさは

【図表7】「お金」と「成果」の好循環をつくる ～学納金を学生募集に生かすエコシステム



【図表8】高校生が成長イメージを持てるようにデザイン化して伝える



学納金を学生募集に生かす エコシステムづくりを

投資に込められた期待に
教育の質で応える

学納金は、学生が大学の教育に期待して支払う「投資」だと言える。受け取った「お金」によって大学は、学生が期待する（それ以上の）教育を提供することが求められる。その教育の「成果」をアピールして、大学にとって望ましい量と質の学生を確保する。このような「お金」と「成果」の好循環が、大学がめざすべき、いわゆる学納金のエコシステムと言えよう【図表7】。

この循環の中で補助金や寄付金を上手に活用し、さらに教育をレベルアップさせると、「成果」がより大きくなり、学生募集に好影響を与えられる。

この「お金」と「成果」の好循環を実現するために不可欠な要素を整理すると、①入学定員の確保(量) ②学び合う集団づくり(質) ③学修成果の可視化 ④学修成果のデザイン化、の4つになる。

多様な入学者を受け入れ
学び合う集団へと育成

学納金の多寡は学生数に比例するので、教育に十分なお金を使う状態にするには、①入学定員の確保(量)は欠かせない。

しかし、教育を活性化させるには原資があるだけでは不十分だ。②学び合う集団づくり(質)を意識的に行う必要がある。

グローバル化が進み、変化の激しさが増す社会を生き抜く力を育てるには、多様な人々と協働する経験が求められる。大学でそうした経験を積むことができる環境をつくるには、多様な入学者を集め、彼らを「混ぜる」ことだろう。入試改革は、それを推進するチャンスだ。

入試の検討においてはまず、自らの学びにとって理想的な入学者の構成を考えることから始めるとよいだろう。自で伸びるのはどのような学生なのかをデータに基づき検討し、ターゲットとなる学生像を明確にする。そのうえで、

集団の多様性を高めることや、入学定員を確保するために必要なことを考え、募集広報や入試のしくみを工夫する。受け入れた学生は、入学前教育や初年次教育、学部教育を通して、互いに学び合う集団へと育てていく。

入学者は、入試方式によって学力や資質、志望度などに違いが見られる。共に学ぶ体験を通して互いに影響し合い、それが成長につながるというかを学習習慣や学習意欲、思考力といった学びの姿勢・程度を測る指標により可視化して検証する。指標を全学共通にすれば、こうした学生の育成が全学的な課題であることが明瞭になり、教職員を巻き込みやすくなるだろう。全学的な取り組みになると、募集広報に利用することも可能になる。

学修成果を可視化し デザイン化して伝える

教育で挙げた成果を学生募集に結び付けるためには、その成果が受験生や保護者、高校教員に魅力を伴う形で伝わっていないと伝えない。そのためにも、③学修成果の可視化を行う必要がある。

しかし、ただ可視化して結果を

見せるだけでは、相手には伝わりにくい。④学修成果のデザイン化【図表8】が重要で、そのときに考慮しておきたいのが高校生の進路意識の変化だ。高校での進路指導は、「あなたは何になりたい?」を問いかける「職業逆算型」から、「あなたの力を世の中はどう生かしたい?」を問いかける「探究型」へと変化しつつある。そのため、「自分の力を伸ばせる大学かどうか」が、高校生の大学選びにおいて大きな比重を占めるようになるだろう。さまざまな取り組みが学生の成長にとってどう役立っているかという視点で整理し、ストーリーにして伝える努力が求められる。

高大接続改革により、受験生や保護者、高校教員は入試の変化に敏感になっている。そのため、教育の特徴を選抜方法を通じて伝える手法も効果的だ。

例えば、グローバル人材の育成が特色の大学であれば、英語4技能を重視した入試と留学プログラムを関連させる。キャリア教育に特色のある大学であれば、高校で始まっているeポートフォリオの活用をキャリア形成の面から支援する。こうした取り組みは大学の強みを高校生や高校教員に伝える有効な方法だと言えよう。